書評：傷だらけの百名山

白崎　仁

専門書ばかりでは,頭が硬くなってしまうとの危機感から、たまには一般書も手にしたいと思っていたところ、雑誌：山と渓谷に、加藤久晴（著）傷だらけの百名山のコマーシャルをみかけた。書店に発注し、ようやくそれを手にした。深田久弥の日本百名山は全国的に有名で、2・3年前にはテレビでも毎日連載放送されて、重厚な音楽とともに勇壮な山々が紹介されていた。この「傷だらけの百名山」は、それとは視点のまったく異なるものである。百の山すべてを対照にしたものではないが、主要な山の実態を日記のように紹介している。書名からも自然破壊を取り扱ったものであることはすぐに見当がつくが、著者は民放テレビ局ディレクターとして各地を取材しながら、単に自然破壊を批判するだけでなく、常識ある一般ハイカーの視点から、登山者のモラル低下、山小屋の管理者の姿勢、酸性雨の深刻な影響、行政の怠慢、税金のむだ使い、どん欲な開発計画、マスコミに対する開発関連企業の不当な干渉など、多方面に深くふみこんで実例を紹介して、かつての百名山の実態を憂慮している。

この本の最初のほうの山々の記事を読み進むと、「これでもか、これでもか」と出される破壊の現状にだんだん不愉快になり、日記調の表現にもあきてしまって、すっかり著者の「罠」にはまってしまう。いわば、山登りの長いアプローチに、すっかりへばってしまったようなものか。急坂にとりついたところで、自然保護活動に熱心な山小屋の管理人や地域の活動家などのとりくみが紹介されている。

著者は、やや独断的なハイカーのようで、山小屋でも個室にとまり、林道の開発やロープウエーを批判しながらも、車やロープウエーを利用したり、ゴミの処理をどうするか心配しながらも小屋でビールを買う。しかし、これも世人とはかけはなれた登山家とのイメージを持たれない、親しみある人物として読者には好感をあたえるようだ。

著者が批判する一般登山者の非行は、私にもあてはまることが多く、山小屋のビールの誘惑にも負けるし、スキーやリゾートホテルも経験済で、実に心苦しい。調査のため、やむをえず危険な場所（特別保護地域）にも立入ることが多く、ある時、こっちは一生懸命植物の調査中に、山草に興味を持つオバタリアンの集団に囲まれて、あれはなんだ、これはなんだ、と花の解説をせがまれ、「さっさと先にいってもらえないか」と心の内で叫んだこともある。小心者で、自ら悪いことをしているなと思っているので、他人が無謀な山荒しをしている現場に出会っても、それを注意する勇気が出ないが、著者は勇敢にそれをとがめているのはすごい。しかし、注意するまえに反撃をおそれて逃げ道を用意する心がけもあって、精神的には私とあまり差はないかもしれない。

私は、町なかで、ゴミ袋をかかえて歩いていた時、うっかりプラスチックゴミを落として通りすぎたが、「おとしましたよ」と大きな声で注意されたことがある。振り返ると、一見して障害者とわかる人ではないか。貴重品ならまだしも、ゴミならだまって見過ごすところだ.私は大変はずかしい思いをした。

山中でのゴミやトイレの問題は、我々が集団で行動する時には必ずつきまとうことで、かつては人目を避け、無人の場所でテントを建てて自由を満喫していたが、最近は一般人が四駆でどこまでも追いかけてくるので、できるだけ公的な施設がある所に金をはらって泊り、燃えるゴミは処理をたのみ、燃えないゴミは持ち帰り、これらの問題を解決しようとつとめている。それでも「とるのは写真だけ、残すのは足跡だけ」という標識は、しかし、「足跡を残すとはなにごとか！」と著者に厳しく批判されそうである。自然に悪影響を与えない行動の難しさを痛感させられる。

著者は、批判ばかりをまとめたのでなく、良識ある山小屋の管理人、宿泊者を篤くもてなす料理や宿の主人の応対、にぎやかなロープウエーコースとは別な、一般人があまり立ち入らない静かなコースなども紹介し、あるべき本来の山歩きの姿を求めている。自然が満ち溢れ、人の気配のない場所はますます少なくなり、そのような場所を探すのが実に難しい時代になった。

今年8月の調査会で、尾瀬を源流とする福島県境の只見川上流の「白沢の池」までの道を探索した。そこは、1988年には尾根筋までの踏み跡があり、その時には頂上付近まで到達できたが、1500m付近にあるとされる池は発見できないまま撤退した所である。今は、歩く人がなくて、すっかり廃道となり、永久に保存された「幻の池」となってしまった。3Kのスポーツは世の中から敬遠され、中高年のハイカーは体力不足で人気のない所はますます遠い存在となる。百名山はだめになっても、すこしずつ自然の回復するところも現れてきたのか、「白沢の池」とは隣あわせの平が岳＜中の俣道＞は、20年ほど前に開通した登山道で、皇族の登山がその破壊のきっかけのようにあつかわれている。実際には順序は逆で、それ以前に林道がつくられ、上流のブナの森をすべて持ち去ったところを皇族が歩いたのではない

か。森林組合は、一般人に伐採の最中を見せないように遮断機を設け、森を消失させた後に開放した。しかし、その結果、登山者が急増して山頂部の広大な湿原は破壊され、森を失った川沿いの道は崩れて車の通行が危険になったため、再び遮断した。これで自然は回復に向っていくのかと思っていたが、今年、遮断された道を歩いてみると、なんと道路を改修中ではないか。開通は2年後らしい。誰も通過する必要のない道を、誰が誰の金を注ぎ込んでいるのか？

今年6月に、中里村の景勝地七つ釜を訪れた。二年前の水害で渓谷は崩壊し、復元作業が行われている場所である。入口にたつ景勝地の看板にはその谷が紹介されているが、谷の奥まで歩くと、けたたましい騒音が山々にこだまする中で、ショベルカーが動き、ダンプカーが盛んに往復している。コンクリートの砂防ダムを建設しているのだ。私のあとから、夫婦づれの観光客が来たが、その光景に驚いて「ばかばかしい、来なければよかった。」といって帰っていった。最近、砂防ダムが完成したが、コンクリートの壁を見て、いったい誰が感動するのだろうか。昨年は、湯沢町側から林道を入って、この釜川源流を調査した。かつて広大なブナの森だった所は、ほとんどの立木が持ち去られ、笹やぶとなっていた。これでは、下流に洪水が発生するのも当然だろう。この現場の加害者は営林署で、被害者はブナの森と中里村の七つ釜、そして景勝地を奪われた人々だろうが、砂防ダム建設の資金はいったい誰が出しているのか？失われた景勝地は二度ともどらない。（読売新聞　1997年11月7日記事参照）

読　売　新　聞　　1997年（平成9年）11月7日（金曜日）

七ツ釜 2年ぶり復活

中里 コンクリ使い景観維持

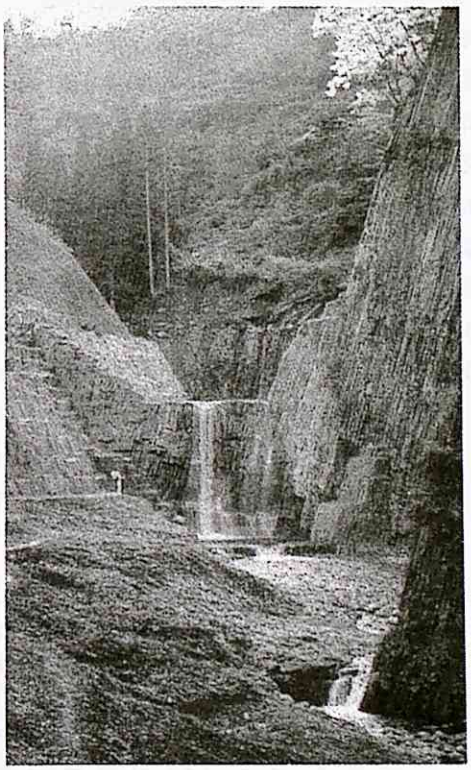
一九九五年春に崩壊した中里村の名勝天然記念物「七ツ釜」が砂防ダムとして復活し、きょう七日に完工式が行われる。コンクリートで型をとった「擬岩」を使ったダムは元通りの滝とは言えないものの、自然の風景に溶け込んだ景観を形づくっており、村では新たな観光名所にしたいと期待している。

七ツ釜は苗場山系の釜川の渓流約一キロにわたって点在した七つの滝を指す。ところが、九五年四月、雪解けの出水で最上流の一番滝右岸が崩れ、約三万三千立方㍍の土砂が流出。下流の滝もすべて埋まってしまった。

もともと崩れやすい地盤で、さらに崩壊の危険があるため、建設省湯沢砂防工事事務所が砂防ダムの建設を決定、昨年五月に着工した。この際、縦に四角柱の岩が並ぶ柱状節理を特徴とした名勝の風景を、可能な限り再現しようと、ダム表面にコンクリートで本物の岩そっくりに型取りした擬岩を張りつける全国初の工法を採用した。

七ツ釜は村にとってシンボルであると同時に、貴重な観光資源。同村の太島憲一・商工観光係長は「新しい名所になった。今後は、県外観光客などにもPRできる」と「名勝復活」を喜んでいた。

全国初の工法を採用



擬岩を使ったダムで復元された七ツ釜

95年に雪解け水で崩壊してしまった名勝・七ツ釜